６月２２日（日）主日礼拝レジュメ
「働くことの意味」伝道者の書１章３節

「益」は商業用語。
ジョーンズ「人生における労苦は人に（　　）配当を支払わない。」
労苦＝骨折って働く、実際の労働。報酬を得るため。生活維持、余暇の楽しみが目的。
ふさわしい配当が支払われていない＝働くことの空しさ。

単調な一日一日が過ぎていく。同じようなことの繰り返し。家族のためと思ってがんばっていたら、家族も離れていく。退職、臨終の間際に自分の人生を振りかえり、仕事一色で他に何もない自分は何だったのかと考える人もある。→ふさわしい配当は支払われていない。

伝道者の書の作者も、日の下でどんなに労苦しても私たちにふさわしい配当が払われることはない。空しさがどこかに必ず残ると言う。
聖書は、（　　）がこの天地万物のすべてのものを造られた、最後に（　　）を造られたということが記されている。

（　　）が造られた地を（　　）が支配するように（　　）と言われた。
聖書の支配は搾取ではなく、地を管理するということ。必要に応じて手入れする。

労働は（　　）から（　　）にゆだねられていることであり、神からの賜物であり祝福。特に（　　）の結果としての豊かな実りはその（　　）の結果。

ですから本来労働は必要なものであり、決して（　　）を感じるようなものではなかった。しかし、人に（　　）が入ってきてこの労働が大きく変化した。まず罪によって地が（　　）ことによって、労働そのものが（　　）ものになってきた。それと同時に、（　　）によって労働の質そのものが変化。つまり本来神からの（　　）であり、神からの（　　）のはずである労働が、自己満足の追及、富みを得る手段に変化。（　　）がすべて、欲求を満たす手段。人は自己中心なので、仕事をしていく上でさまざまな人間関係の問題を感じて悩む。

（　　）の結果、労働はつらく苦しいもの、まさに労苦となった。

神を信じることで、罪が赦され、人生の方向転換がなされる。（　　）中心から（　　）中心。仕事は（　　）からの（　　）。神と人とに仕えることのできる喜び。神の（　　）を仕事を通して表す。

労働に対する見方が変われば、仕事そのものに対する考えかたも電化する。仕事に対する空しさもなくなるはず。仕事の内容は変わらないかもしれない、回りの状況は変わらないかもしれない。自分が変われば、すべて変わる。

クリスチャンは、神の天での報いを期待して仕事に向かえる感謝と喜び。